原 著

歯の健康管理と治療状況に関するアンケート調査

——第1報：歯周疾患に関する調査——

萩原 さつき 今野 寿美 杉山 俊一
浅井 浩 杉山 栄一 中元 弘
和泉 雄一 渡辺 久 野口 俊英
石川 烈

東京医科歯科大学歯学部第2歯科保存学教室（主任指導：石川 烈教授）

（1985年9月28日 受付）

Epidemiological Survey on Dental Prophylaxis and Treatment by Questionnaire

——Primary Report——

Satsuki Hagiwara, Toshimi Konno, Shunichi Sugiyama
Hiroshi Asai, Eiichi Sugiyama, Hiroshi Nakamoto
Yuichi Izumi, Hisashi Watanabe, Toshihide Noguchi
and Isao Ishikawa

Department of Periodontology, School of Dentistry, Tokyo Medical and Dental University
(Chief : Prof. Isao Ishikawa)

The purpose of this study was to evaluate the answers to the questions about oral health care, periodontal diseases and the relation to dental clinic.

The questionnaire concerning "the consciousness of oral health and the actual condition of dental treatment" was sent to 4,000 inhabitants and 1,000 bank clerks as a part of the epidemiological survey of periodontal disease.

The percentages of answers obtained were 35.5 and 62.5 respectively.

They were analyzed according to sex, age group and by group of inhabitants and bank clerks. The following results were obtained.

1) About 96 percent of the people recognized the importance of dental care, but only a few had prophylactic treatments.

2) Many people of over 50-years-old complained of reduced function of mastication.

3) One-half of the people was conscious of gingival bleeding and swelling and twenty percent felt a tendency of tooth mobility.

The ratio of people who had mobile teeth increased with age.

4) About one-half of the people recognized the necessity to have dental treatment and one-eighth was actually having dental treatments.

This survey seems to show the general consciousness of oral health and the actual dental condition in Japan.

I. 結 言

高齢化社会を迎えつつある現在、歯科医療技術の進歩とともに人々の歯科医療に対する意識も高まってきた。そこで、このたび歯周疾患の疫学調査の一環として、歯科医療に対する意識と現状を知るために“歯の健康と治療の実態”についてのアンケート調査を行った。実施した時期は昭和59年3月17日～4月30日までの約1カ月半であった。

II. 対象および調査方法

調査対象としては2つのグループを設定した。1つは住民基本台帳から任意に選んだ一般の人々4,000人で、他の1つは歯科診療所をもつ特定の

集団である都内の銀行員1,000人であった。

この2つのグループに属する人々に、表1に示す調査用紙を配布し、おのこの質問事項について回答してもらった。

“歯の健康と治療の実態”に関するアンケート調査は4つの質問からなり、1番目は本人とその配偶者の性別、年齢、2番目は歯の健康管理に対する意識、3番目に本人とその配偶者の歯の治療状況、4番目は18歳以下の子供に対する歯列矯正についての質問であった。今回は第1報として歯の健康管理に関する質問2と、歯周疾患に関する質問項目を含む質問3の1～8までと、歯科医院との関係を表す質問3の9～12までの項目について分析を行った。

表1 歯の健康と治療の実態に関するアンケート

1. あなたご自身とあなたの配偶者についてご記入下さい。なお独身の方はご本人欄のみご記入下さい。

	1	2
性 別	①男 ②女	①男 ②女
年 齢	□□才	□□才

※年齢は昭和59年1月1日現在の満年齢をご記入下さい。

2. あなたご自身の歯の健康管理について次の質問にお答え下さい。

質 問 項 目	回 答 欄
1. あなたは歯の健康管理をどうお考えですか	①重要である ②それ程重要なことと考えていない
2. 人間の歯は自分で良く管理することによって老後まで使えるようになったことをご存知ですか	①知っている ②知らない
3. あなたは年に1回以上歯科医院(病院)に行って歯石のクリーニング等の健康管理をしていますか	①はい ②いいえ
4. あなたは1日に何回歯を磨いていますか	①朝、昼、晩の3回 ②朝、晩の2回 ③1日1回 ④磨いていない
5. 歯と歯の間を特にそうじしていますか	①デンタルフロスでそうじしている ②歯間ブラシでそうじしている ③その他で()そうじしている ④していない

3. あなたご自身とあなたの配偶者の歯の治療状況について、次の質問にお答え下さい。なお独身の方は「本人欄」のみご記入下さい。

質 問 項 目	回 答 欄	
	本 人	配 偶 者
1. 不自由なく、物がかめますか	①かめる ②かめない	①かめる ②かめない
2. 歯を磨いたとき等に歯ぐきから血がでることがありますか	①ある ②ない	①ある ②ない
3. 歯がグラグラしていますか	①全体がグラグラしている ②グラグラしている歯もある ③グラグラしていない	①全体がグラグラしている ②グラグラしている歯もある ③グラグラしていない
4. 歯ぐきのはれたことがありますか	①よくある ②ときどきある ③ない	①よくある ②ときどきある ③ない
5. 歯ぎしりをしたといわれたことがありますか	①よくある ②ときどきある ③ない	①よくある ②ときどきある ③ない
6. 歯の間によく物がはさまりますか	①よくある ②ときどきある ③ない	①よくある ②ときどきある ③ない
7. これまでに歯を抜いたことがありますか (ただし、乳歯および親知らずは含めません)	①抜いた ②抜かない	①抜いた ②抜かない
8. 現在残っている歯で、つめたり、かぶせたり、さしたりしている歯がありますか	①ある ②ない	①ある ②ない
9. 現在、歯科医院(病院)にかかっていますか	①かかっている ②かかっていない	①かかっている ②かかっていない
10. 現在、歯科医院(病院)へ行く必要がありますか	①ある ②ない	①ある ②ない
11. かかりつけの歯科医院(病院)がありますか	①ある ②ない	①ある ②ない
12. 最近1年間(昨年1月～現在)に歯科医院(病院)に歯の治療で行きましたか	①行った ②行かない	①行った ②行かない

Ⅲ. 結 果

1. アンケート回収状況

分析可能な有効回答件数は、一般の人々(グループA)で1,421件、銀行員(グループB)で624件であり、有効回答率はおのおの35.5, 62.4%であった。

2. 回答者の構成

本人とその配偶者を含めた有効回答者の構成を性、年齢層別に調べた。図1に示すように、グループAでは男性1,298人、女性1,280人であり、グループBでは男性333人、女性443人、全体では男性1,631人、女性1,723人、総数3,354人であった。

年齢層別にみると、グループAでは20, 30,

図 1 回答者の構成 (総数3,354人) 性・年齢層別

図 2 質問 2 の 1 あなたは歯の健康管理をどうお考えですか (年齢層別)

40, 50歳代ではほぼ均等に分布していたが、グループ B では20歳代では女性が男性に比較して多く、50歳代では他の年代に比べて少ない状態であった。

3. 各質問に対する回答結果

各質問に対する回答状況の分析は、グループ別、性別、年齢層別に行った。なお、年齢層別の分析は20歳以下の人は総数の0.7%, また60歳以

上の方は総数の1%とその占める比率が小さかったために今回は20, 30, 40, 50歳代の4つの年齢層について試みた。

1) 質問 2 の 1 “あなたは歯の健康をどうお考えですか” に対して “重要である” と答えた人は約96%であり、男女間、年齢層間、グループ間には差が認められなかった (図 2)。

2) 質問 2 の 2 “人間の歯は自分で良く管理す

図3 質問2の3 あなたは年に1回以上歯科医院(病院)に行って歯石のクリーニング等の健康管理をしていますか(年齢層別)

ることによって老後まで使えるようになったことをご存知ですか”に対して“知っている”と答えた人は約70%であった。その比率は男女間で差はみられず、20歳代では約63%、50歳代では約77%と増齢に伴って増加した。また銀行のグループBでは約76%、一般のグループAでは約69%とグループBの方がわずかに大きい比率を示した。

3) 質問2の3 “あなたは年に1回以上歯科医院に行って歯石のクリーニング等の健康管理をしていますか”に対して“はい”と答えた人は約20%であった。その比率は男女間に差はなく、20歳代では約16%で50歳代では約25%と増齢とともに大きくなり、グループBでは約31%、グループAでは約16%と、グループBはグループAの約2倍大きい比率を示した(図3)。

4) 質問2の4 “あなたは1日何回歯を磨いていますか”に対して“朝、昼、晩の3回”と答えた人は約22%，“朝、晩の2回”と答えた人は約45%，“1日1回”と答えた人は約32%，“磨いていない”と答えた人は約0.5%であった。“1日3回磨いている人”は女性では男性の約5倍多く、20歳代では50歳代の約3倍と若い年代の方が歯を磨く回数が多かった。またこの比率は、グループBではグループAの約5倍大きいことが示さ

れた(図4A, 4B)。

5) 質問2の5 “歯と歯の間を特にそうじしていますか”に対して“デンタルフロスでそうじしている”人は約10%，“歯間 ブラシでそうじしている”人は約22%，“その他でそうじしている”人は約12%，“していない”人は約55%であった。なんらかの器具を用いて歯間部を清掃している人の比率は、男女間、グループ間で差はなく、20歳代では約35%、50歳代では約57%と増齢に従って増加していた(図5)。

6) 歯の機能に関する質問3の1 “不自由なく物がかめますか”に対して“かめる”と答えた人は約85%であった。その比率は男女間で差はなく、20, 30, 40歳代では約85%であるのに50歳代では約73%と急に減少していた。またグループBでは“かめる”人の比率は約93%で、グループAの約82%に対して大きいことが示された(図6)。

7) 質問3の2 “歯を磨いたとき等に歯ぐきから血が出ることがありますか”に対して“ある”と答えた人は約53%であった。その比率は男性約55%、女性約51%でわずかに男性が大きく、20歳代では約58%、50歳代では約48%と増齢とともに減少し、グループ間での差は認められなかった(図7)。

図 4 A 質問 2 の 4 あなたは 1 日に何回歯を磨いていますか (年齢層別)

図 4 B 質問 2 の 4 あなたは 1 日に何回歯を磨いていますか (男女別)

8) 質問 3 の 3 “歯がグラグラしていますか” に対して “全体がグラグラしている” 人は約 2%, “グラグラしている歯もある” 人は約 20%, “グラグラしていない” 人は約 79% であった。歯の動揺を認める人の比率は男女間で差はなく, 50 歳代では 20 歳代の約 3 倍と増齢とともに増加し,

グループ A の方がグループ B の約 2 倍と大きいことが示された (図 8)。

9) 質問 3 の 4 “歯ぐきがはれたことがありますか” に対して “よくある” と答えた人は約 6%, “ときどきある” と答えた人は約 46%, “ない” と答えた人は約 49% であった。歯肉の腫脹を

図5 質問2の5 歯と歯の間を特にそうじしていますか (年齢層別)

図6 質問3の1 不自由なく、物がかめますか (年齢層別)

経験した人の比率は男性の方が大きく、20歳代では約44%，50歳代では約62%と増齢に従って増加し、グループ間に差は認められなかった(図9)。

10) 質問3の5 “歯ぎしりをしたといわれたことがありますか” に対して “よくある” と答えた人は約7%， “ときどきある” と答えた人は約19%， “ない” と答えた人は約74%であった。歯ぎ

しりをしたことのある人の占める比率は男性では約31%，女性では約22%と男性の方が大きく、20歳代では約30%，50歳代では約20%と増齢に伴って減少し、グループ間に差はみられなかった(図10)。

11) 質問3の6 “歯の間によく物がはさまりますか” に対して “よくある” と答えた人は約36

図7 質問3の2 歯を磨いたとき等に歯ぐきから血がでることがありますか。(年齢層別)

図8 質問3の3 歯がグラグラしていますか。(年齢層別)

%, “ときどきある”と答えた人は約51%, “ない”と答えた人は約14%であった。歯間部に食片圧入しやすい人の占める比率は男性では約92%, 女性では約82%と男性の方が大きく, 20歳代では約83%, 50歳代では約91%と増齢とともに増大し, グループ間での差はみられなかった(図11)。

12) 質問3の7 “これまでに乳歯あるいは親知らず以外の歯を抜いたことがありますか” に対

して“抜いた”人の比率は約63%, “抜かない”人の比率は約37%であった。“抜いた”人の占める比率は男女間では差がなく, 20歳代では約50%であるのに50歳代では約80%と増齢とともに増大し, グループAでは67%, グループBでは52%とグループAの方が大きいことが示された。

13) 質問3の8 “現在残っている歯でつめたり, かぶせたり, さしたりしている歯があります

図9 質問3の4 歯ぐきがはれたことがありますか (年齢層別)

図10 質問3の5 歯ぎしりをしたといわれたことがありますか (年齢層別)

か”に対して“ある”と答えた人は約93%，“ない”と答えた人は約8%であった。“ある”と答えた人の比率は男性が約90%，女性が約95%とわずかに女性の方が大きく，各年齢層間で差はみられなかった。グループ間では，グループBで97%，グループAで91%とグループBの方がわずかに大きかった。

14) 質問3の9 “現在歯科医院にかかっていますか”に対して“かかっている”人は約13%であった。この比率は男女間およびグループ間に差はみられず，20歳代では約10%であるのに50歳代では約17%と増齢により増える傾向がみられた (図12)。

15) 質問3の10 “現在，歯科医院に行く必要が

図11 質問3の6 歯の間によく物がはさまりますか (年齢層別)

図12 質問3の9 現在、歯科医院 (病院) にかかっていますか (年齢層別)

あります。”に対して“ある”と答えた人は約46%であった。その比率は男女間に差はみられず、50歳代では他の年齢層に比べて約51%と大きく、またグループ A では約49%、グループ B では約38%とグループ A の方が大きいことが示された (図13)。

16) 質問3の11 “かかりつけの 歯科医院がありますか” に対して “ある” と答えた人は約51%

であった。その比率は男性約46%、女性約56%と女性の方が大きく、20歳代では約40%であるのに50歳代では約65%と増齢とともに増加していた。またグループ間で差は認められなかった (図14)。

17) 質問3の12 “最近1年間に 歯科医院に行きましたか” に対して “行った” 人は約52%であった。その比率は50歳代では約57%、20歳代では約48%で、高齢者の方が若年者よりも大きく、男

図13 質問3の10 現在、歯科医院（病院）へ行く必要がありますか（年齢層別）

図14 質問3の11 かかりつけの歯科医院（病院）がありますか（年齢層別）

女間、グループ間に差はみられなかった(図15)。

18) 回答結果についてのクロス分析

1)～17)までに述べた質問項目に対して回答別に得点を与え、クラマーのコンティンジェンシ係数とスチュアートのタウ係数を用いてクロス分析を行った。

表2Aに示すように質問2の1～5までの“歯の健康管理に対する意識”と質問3の10～12の歯科医院との関係についての項目に相関が認められ

た。また歯周疾患の実態に関する質問項目の間にも表2Bに示すような相関が認められた。

質問3の1“不自由なくかめる”と3の2“歯ぐきからの出血”，3の3“歯がグラグラ”，3の4“歯ぐきのはれ”，3の6“歯にはさまる”，3の7“抜歯の経験”，3の9～12の“歯科医院との関係”についての質問に対する回答結果に相関があった。また質問3の2“歯ぐきからの出血”と3の10“通院の必要”との間に、質問3の

図15 質問3の12 最近1年間(昨年1月～現在)に歯科医院(病院)に歯の治療で行きましたか(年齢層別)

3 “歯がグラグラ”と質問3の10～12の“歯科医院との関係”との間に、さらに質問3の4, “歯ぐきのはれ”と質問3の10, 12 “歯科医院との関係”の間にも相関がみられた。

IV. 考 察

アンケートの回答結果から、歯の健康管理に対する実態・歯周組織の機能・歯周疾患の罹患状態・既応歴・歯科医院との関係等についての分析を試みた。

1. 歯の健康管理に対する実態

1) 質問2の1, 2は歯の健康管理に対する意

識を尋ねている。

質問2の1 “歯の健康管理”に対して96%の人が“重要である”と答えており、質問2の2 “歯は管理することによって老後まで使えるようになったこと”に対しては約7割が“知っている”と答えている。この2つの質問の回答状況から、歯の健康管理に対する意識は非常に高いと思われる、特に増齢とともに高くなる傾向がみられた。

2) 質問2の3～5は“歯の予防管理”について約2割の人が“行っている”と回答している。質問2の4 “歯磨きの回数については男女間で大きな違いがみられた。“1日3回磨く”人は男性

表2 A クロス分析により相関がみられた質問事項 (I)

質問 2 の 1	あなたは歯の健康管理をどうお考えですか	質問 3 の 10	現在、 歯科医院 (病院) へ行く必要がありますか	
質問 2 の 2	人間の歯は自分で良く管理することによって老後まで使えるようになったことをご存知ですか	と	質問 3 の 11	かかりつけの歯科医院 (病院) がありますか
質問 2 の 3	あなたは年に 1 回以上歯科医院 (病院) に行って歯石のクリーニング等の健康管理をしていますか		質問 3 の 12	最近 1 年間 (昨年 1 月～現在) に歯科医院 (病院) に歯の治療で行きましたか
質問 2 の 4	あなたは 1 日に何回歯を磨いていますか			
質問 2 の 5	歯と歯の間を特にそうじしていますか			

表 2 B クロス分析により相関がみられた質問事項 (Ⅱ)

質問 3 の 1 不自由なく、物がかめますか	と	質問 3 の 2 歯を磨いたとき等に歯ぐきから血がでることがありますか
		質問 3 の 3 歯がグラグラしていますか
		質問 3 の 4 歯ぐきがはれたことがありますか
		質問 3 の 6 歯の間によく物がはさまりますか
		質問 3 の 7 これまでに歯を抜いたことがありますか (ただし、乳歯および親知らずは含めません)
		質問 3 の 9 現在、歯科医院(病院)にかかっていますか
		質問 3 の 10 現在、歯科医院(病院)へ行く必要がありますか
		質問 3 の 11 かかりつけの歯科医院(病院)がありますか
		質問 3 の 12 最近 1 年間(昨年 1 月～現在)に歯科医院(病院)に歯の治療で行きましたか
質問 3 の 2 歯を磨いたとき等に歯ぐきから血がでることがありますか	と	質問 3 の 10 現在、歯科医院(病院)へ行く必要がありますか
質問 3 の 3 歯がグラグラしていますか	と	質問 3 の 10 現在、歯科医院(病院)へ行く必要がありますか
		質問 3 の 11 かかりつけの歯科医院(病院)がありますか
		質問 3 の 12 最近 1 年間(昨年 1 月～現在)に歯科医院(病院)に歯の治療で行きましたか
質問 3 の 4 歯ぐきがはれたことがありますか	と	質問 3 の 10 現在、歯科医院(病院)へ行く必要がありますか
		質問 3 の 12 最近 1 年間(昨年 1 月～現在)に歯科医院(病院)に歯の治療で行きましたか

では約 1 割であるのに女性では約 5 割に達していた。質問 2 の 5 “歯と歯の間のそうじ”については約 45% の人がなんらかの手段を用いて行っていると答えている。この 3 つの質問に対する回答結果と前述の 2 つの質問に対する回答結果から、歯の健康に関する意識は高いのに、実際に予防管理を行っている人の割合は少ないことが推察された。また身近に歯科診療所が存在するグループの方が、より予防管理を行いやすいことも明らかになった。

2. 歯の機能について (質問 3 の 1)

質問 3 の 1 “不自由なく物がかめますか”に対して約 85% が “かめる” と答えている。年齢層別にみると若年者ほど不自由なく物がかめる人の比率が高い傾向がみられ、20 歳代では約 9 割に達しているが 50 歳代では 7 割程度であった。これは歯

周疾患や咬合障害の進行状態を反映しているといえよう。

3. 歯周疾患の罹患状況 (質問 3 の 2～4)

質問 3 の 2 “歯ぐきからの出血の有無”に対して約半数の人が “ある” と答えている。また若年者の比率が高く 20 歳代では約 58% に達していたが、50 歳代では約 45% であった。質問 3 の 3 “歯の動揺の状態” について約 2 割の人が歯の動揺を訴えた。質問 3 の 4 “歯ぐきの腫脹の有無” については約半数の者が “ある” と答えている。また高年齢層ほど高い比率を示し、20 歳代では 44% であるのに 50 歳代では 62% に達している。以上 3 つの質問により、歯肉に炎症症状がみられる人は全体の半数以上で、歯の動揺を訴える歯周疾患の進行を示す人は約 2 割以上を占めることがわかった。

4. 歯周疾患と関連性のある事項と考えられる ブラキシズム(質問3の5)と食片圧入(質問3の6)

質問3の5“歯ぎしりの経験の有無”について男性の3割, 女性の2割が“ある”と答えている。質問3の6“食片圧入の有無”について男性の約9割, 女性の約8割が“ある”と答えている。この2つの質問から全体の約3割の人が歯ぎしりを経験し, 約8割以上の人が食片圧入を訴えており, 増齢あるいは歯周疾患の進行との関係が深いと考えられる。

5. 抜歯の経験(質問3の7)と治療状況(質問3の8)

質問3の7“抜歯の経験の有無”について約6割が“ある”と答えている。またその比率は高年齢ほど高く20歳代では49%であるのに50歳代では82%に達していた。質問3の8“充填, 補綴物の有無”について9割以上の人が“充填, 補綴処置”を受けていると答えた。この2つの質問の回答から約6割の人がなんらかの原因で抜歯を経験し, 約9割の人がなんらかの形で歯冠修復を受けていることがわかった。

6. 歯科医院との関係

質問3の9“現在歯科医院にかかっているか”について約1割の人が“かかっている”と答えた。質問3の10“現在歯科医院にいく必要があるか”について約半数の人が“ある”と答えた。質問3の11“かかりつけの歯科医院があるか”について約半数が“ある”と答えた。質問3の12“最近1年間に歯科医院に歯の治療で行ったか”について約半数が“行った”と答えている。以上4つの質問の回答から, 全体の約1割の人が現在歯科治療を受けており, 約半数の人に歯科医院に行く必要があり, またかかりつけの歯科医院があり, 最近1年間に歯科を受診したことがあることがわかった。

7. 質問に対する回答結果の間の相関性

1) “歯の健康管理に対する意識と予防管理”(質問2の1～5)と“歯科医院との関係”(質問3の10～12): 関連度が高い。意識が高く, また日常の予防管理がしっかりしているほど, かかり

つけの歯科医院をもち, 過去1年間に通院しているが, 現在の通院の必要性が低いことを示している。

2) “不自由なくかめる”(質問3の1)と“歯の機能”(質問3の2～4), “歯間部への食片圧入”(質問3の6), “抜歯の経験”(質問3の7), “歯科医院との関係”(質問3の9～12): 関連度が高い。すなわち, 歯が咬合機能を良く営む場合は, 歯周疾患に罹患していない状態で, 原因的事項も存在せず, 抜歯の経験も少なく, 歯科医院との関係も負の相関があることが示されていた。

3) “歯肉からの出血”(質問3の2)と“通院の必要”(質問3の10)および“歯の動揺”(質問3の3)と“歯科医院との関係”(質問3の10～12), さらに“歯肉腫脹”(質問3の4)と“歯科医院との関係”(質問3の10, 12): 関連度が高い。すなわち歯周疾患の症状を呈してくると通院の必要を認め歯科医院で治療を受けようと思うに至るが, 逆に通院して治療を受けているものは歯周疾患の症状を示さない。以上17の質問の回答結果から, 歯科医療に対する意識, 予防管理および歯周疾患の罹患状況, 歯科医院との関係について, ある程度明らかにその実態が浮かびあがった。

アンケート調査と歯周疾患診査を併用すれば, よりいっそう具体的な結果が得られると思われる。しかし調査対象が大きく有効回答数が, 3,354人とかなり大きな数であったこと, また質問内容が歯科医療に対する意識と現状に関するもので回答しやすく分析も容易であったことを考慮すると, 今回得られた情報は, 現在のわが国での歯科医療の実態を反映するものと思われる。

わが国における歯科医療に関するアンケート調査を報告した文献は少ない。

厚生省では6年ごとに歯科疾患実態調査を実施し, その調査票のなかに“歯ブラシの使用状況”, “フッ化物の塗布状況”についての記入欄を設けている。“歯ブラシの使用状況”については昭和56年度の調査では毎日磨く者は約9割, 1日3回磨く者は約8%であったと報告している。

最近では昭和58年10月に神奈川県が主催して藤

沢市民を対象に歯科健康アンケート、歯科健康調査を併用して行っている²⁾。アンケート調査は16の質問事項を設定している。歯周疾患の症状の有無、歯磨きの習慣の有無とその回数、定期検診、歯石除去の経験の有無について尋ねている。回答をよせた男性52人、女性572人、計624人の結果を集計し、考察を行っている。藤沢市民においては歯周疾患に対する知識が低く、口腔清掃、歯石除去が習慣化されておらず、この集団に対する健康管理機構を組織化する必要があると述べている。

今回のわたくしたちが行った回答結果の分析でも藤沢市民を対象に行って得られた情報と類似していた。高年齢に達するほど歯周疾患が進行し、症状が強く表れ、これを放置しておく咀嚼機能は低下し、抜歯の危機にさらされる。このような歯周疾患に対する意識は非常に高いが、これが直接自分であるいは専門的に行う予防管理と結びつかないことが明らかになった。

今回得られたアンケート調査からの情報やさらに集団に対する口腔検診^{3,4)}によって得られる情報が歯周疾患に関する予防対策を考えるうえでの重要な一助となりうると思われる。

V. 結 論

歯周疾患の疫学調査の一環として住民の“歯に対する意識と治療の実態”についてのアンケート調査を行った。今回は調査した項目のうち、歯の健康管理に対する質問と、歯周疾患に関する質問と、歯科医院との関係を表す質問の回答結果をグループ別、年齢層別、男女別に分析した。

1. 歯の健康管理が重要であると認識している人は約96%と高い比率を示した。

2. 実際に歯石除去を行っている人は約2割、日に3回歯を磨く人は約2割、なんらかの用具で歯間部を清掃している人は約45%と予防管理を行っている人は少なかった。

3. 1日3回歯を磨く人は女性の方が約5倍多かった。

4. 身近に歯科診療所のあるグループでは、予防処置を行っている比率が高かった。

5. 歯の機能に関しては十分にかめる人の比率は約85%で、50歳を過ぎると十分にかめない人は約27%と増える傾向がみられた。

6. 歯周疾患に関する質問では、歯肉からの出血、歯肉の腫脹を自覚する人は約半数、歯の動揺を訴える歯周疾患の進行を示す人は約2割を占めていた。歯ぎしりをする人は約4人に1人の割合で、歯間部に食片が圧入しやすい人は約9割、抜歯の経験者は約6割であった。また約9割の人が歯科処置を受けていた。

7. 歯科医院との関係では、ほぼ8人に1人が現在歯科治療を受けており、約半数の人が通院の必要を感じていた。

8. この調査により住民の歯科保健に対する実態が浮かびあがってきたと思われた。

アンケート調査と口腔検診によって得られる結果を併用し歯周疾患に対する予防対策に取り組んでいく必要がある。

謝 辞

調査、資料分析にご協力下さいました、東京医科歯科大学歯学部第2歯科保存学教室の皆様へ深く感謝申し上げます。

文 献

- 1) 厚生省医務局歯科衛生課編：昭和56年歯科疾患実態調査報告。東京、1983、口腔保健協会、27-28。
- 2) 神奈川県衛生部編：歯科保健調査事業（成人及び老人の歯科疾患）に関する調査報告書（第1報）。神奈川、1984、神奈川県歯科医師会、26-31。
- 3) 石川 烈、本間昭悟、萩原さつき、浅井 浩、長田 豊、和泉雄一、渡辺 久、泉澤勝憲、野口俊英：CPITN(Community Periodontal Index of Treatment Needs)による歯周疾患の疫学調査(第1報)。日本歯周病学会会誌 26(4)：761-778, 1984。
- 4) 萩原さつき、本間昭悟、浅井 浩、今野寿美、大島光宏、泉澤勝憲、野口俊英、石川 烈：CPITN (Community Periodontal Index of Treatment Needs)による歯周疾患の疫学調査(第2報)。日本歯周病学会会誌 27(3)：628-635, 1985。